

## レーザーコンパス

## 日本人と創造性

藤澤和男\*

Kazuo FUJISAWA\*

最近日本人の創造性に関する論議が盛んである。本会誌においても最近中原恒雄氏によって論じられたばかりである。この事は今や我国の工業技術水準が世界のトップレベルにあって、中進国、先進国からの追上げを受けているという背景事情と無縁ではない。私は元来日本人は創造性豊かな民族だと思っている。昔からの伝統的な文化遺産を見てもこの国の風土に合せてうまく工夫されており、感心する所が多い。このような素質と下地があったればこそ、短時日の間に欧米の科学技術を消化、吸収して今日見るような工業大国を造り出すことが出来たのである。現在我国の工業界は粒の揃った優秀な技術者集団と新鋭設備を有して、その製品開発能力は抜群である。少なくともここ当分は我国の工業技術の国際競争力に不安はない。

しかし多くの識者が指摘しているように、我国が新しい技術の芽を生み出す創造力において欧米諸国に一步後れをとっているのも事実である。これまでの我国は外国で発見、発明された新しい技術の芽を抜群の技術開発力で開花させ優秀な製品を作り出して今日の繁栄を築いて来た。長期的視点に立った場合、この新しい芽を生み出す大きな創造力を育成することは非常に大切な事である。

しからばそれにはいかなる方策が有効であろうか。私はこの問題の解決は仲々難しいと考えている。それはこの事がこの国の風土、国民性

と密接に関係していると思うからである。元来、新しい大きな発見、発明は既存の通説を覆して生れるものである。それは在来の学説や考え方、やり方を批判し、それに挑戦する所から生れる。従ってそれを生み出す人物は旺盛な批判精神、反骨精神と強烈な個性を持つのが普通であろう。このような人物は農耕民族を祖先に持つ均質社会の日本の風土にはなじまないのではなかろうか。昔からの村八分や戦時中の非国民呼ばわりなどが示すように、日本の社会は異端者に対して厳しい拒否反応を示して来た。この日本独自の調和を重んじる社会は、労資関係の円満さ、企業内の組織活動の円滑さなどを生み出し、日本企業に抜群の国際競争力を与えたのである。しかし、その反面この事が大発見、大発明を生み出す異才、天才の出現にブレーキを掛けているのも事実であろう。欧米からの女性の旅行者が日本の土を踏んでまず目につくことは、日本女性の服装がその時々流行にほぼ統一されている事だという。最近の学生の大学進学志望先を見ても、判で押したように成績の良い者から順にまず東大、次に京大……、学部別ではまず医学部、法学部……などとあまりにも右へならえ式の選択が目につく。このような大勢順応式の思考に慣れてしまった若者にどのような創造力を期待できるであろうか。高校までの受験準備的教育があたり天才の芽をつみ取っているように思えてならない。今後日本が欧米並みに

\* 大阪大学基礎工学部電気工学科教授 (〒565 豊中市待兼山町1-1)

\* Department of Electrical Engineering, Faculty of Engineering Science, Osaka University, Professor, (1-1, Maçhikaneyama-cho, Toyonaka Osaka, 563)

大発見、大発明を生み出すことを望むならば、我々はもっと異説、少数意見を尊重し、異質な才能を持つ変り者を大切に育て上げるよう温い配慮を払うべきだと思う。そしてまず大学教員の人事にこの事を反映させるよう提案したい。それは激しい生存競争にさらされている企業ではこのような変り者や異端者までを養う余裕はないと思うからである。

日本の大学人で一応研究者と見なされる者を分類すると三つの型に分けられるように思う。A型は論文は発表するものの、その内容は野球用語でいう凡打が大半の者、B型は効率良く活潑にシングルヒットを飛ばす者、C型は三振が多いがたまに長打を飛ばす者である。A型は貴重な大学研究者のポストを占めるに値しないことは言うまでもない。B型は多くの優秀な大学院学生を抱え、研究者の養成という点からも、また企業サイドの研究を助けるという意味からも立派に社会的責務を果している。ただその研究成果が企業の研究成果とあまり変わらないというのも事実であろう。現在の大企業は優秀な研究者と研究設備を持っていて、シングルヒットを飛

ばすのにこと欠かないからである。C型こそ大学にふさわしい大きな研究成果を生み出す型であるが欠点も多い。それは、若い弟子連中にとって先生の行き方があまり参考にならない場合も多いからである。先生が三振の多い中でたまに長打を打つのでは、若い弟子連の真似できるのは三振だけという結果になりかねない。その点、B型は若い弟子連中にとってより身近な存在であり、胸を借りて力をつけるには恰好の存在である。そこで大学教員の望ましい構成としては、B型を主軸として少数のC型を配するのが理想的であろう。ただ日本の現状はC型が少なすぎることである。今こそ我々は寛容な心で反骨精神を持つ異才を温く迎え入れ、C型の比率をせめて1割位に高めたいものである。大学教員の人事に当って論文の数を問題にするような愚かな形式主義は厳しく自戒すべき事と思う。創設当初の阪大で理学部長をされていた八木秀次博士が、当時大学を出て間もない無名の湯川秀樹氏を、論文が少ないという教授会の反対を押し切って講師に迎えられた英断を我々も見習いたいものである。